

解脱と全託

五井先生昌久著『空即是色～般若心経の世界』より

完全な解脱

解脱ということについてお話ししましょう。私がよくいうんですが、仙人のように神通自在になって、姿が消えて何処でも飛んで歩けるような力を持っていても、本当に解脱していないと、正覚を得ないんです。仏さまの境地、神と一体にならないんです。

どういうことかといいますとネ、自分というものと神というものの間に、へだたりがあれば、それは本当に解脱していないんです。

現われている自分というものの想いがスッカリなくなって、神さまからそのまま流れてくる、いつでもそのまま流れてきているという、そういう形にならないと本当の解脱じゃないんです。だから解脱即正覚(じょうかく)というんですね。

何にも把われがない、想いが何にも乱れない、乱れる想いもないんです。一挙手一投足が自然法爾に神さまのほうからやらされている、ということが自分がやっていることと一つになる。

つまり、やらされていることと、やることとが一つになる。観るものと観られるものが一つになる。思うことと思わされることが一つになっていく。そういうのを解脱しているというのです。

ところが一生懸命行をやった、修行した仙人みたいな形の人、行者のような形の人の中には、それは正覚を得た人もありますよ。役行者のような人もいるんだからね。

役行者という人は山から山へ渡り歩いて修行に修行を重ねた人で、初め観音さまをまつって祈っていた。ところが観音さまにも依存しちゃだめだ、と観音像を谷へ捨ててしまって、自分の念力だけで、ついに形が消えちゃうんですね。

屍化仙といいまして、屍を残さないで、いわゆる肉体を消しちゃって、肉体がそのまま靈化しちゃった人なんです。自分の力でネ。それほど凄い人で

す。

役行者ばかりでなくその弟子に随分屍化仙がいるんです。しかし、それだけでは解脱したとはいえないんです。肉体がなくなっただけで解脱したということはない。

神通力の有無に無関係

自分というものが神さまの一つの光の流れだ、ということが本当に心の底からわかりきらないと、解脱したということにならないんですよ。

分けられた自分というものと神さまとが分かれていたら、解脱にならないんですよ。

いくら神通力があって、人の心が全部わかったとしても、ここから姿を消して遠隔地へ飛んでいけるとしても、水の上を歩けたとしても、岩を何も使わずに動かせたとしても、山を動かしたとしても、地震を起こしたとしても、雨を降らせたとしても、それだけでは本当の完全な解脱というわけにはいかないんですよ。

それは何故かというと、奇蹟というものの、自分の力というものに把われているからです。

だから仙人などというのは、一つの行の方法がありましてね、それによっていろんな神通力を出すわけです。ところがそれに把われている。

把われているからその範疇でないもの、離れたものとは交流がうまく出来ないんですよ。

この世の宗教者で立派な人であっても、普通の世間の人とのつきあいが出来なかったりする場合がある。

自分だけは高い所に行っちゃうから、この地球界に住んでいながら、地球界の人とはまるで交渉が出来ないような立場になってしまふ場合もあるんです。

孤高、つまり、自分一人高く人よりそびえ立ってしまうと、他との釣り合いがとれないから、他との付き合いが出来なくなっちゃう、日常の社会の付き合いが出来ないような立場になる人がある。

それは本当は解脱してないんです。大聖は街に隠れ、小聖は山に籠るで、大きな聖人というものは町にいてちゃんと仕事をしているというんですね。

それは何故かというと、自分がどんな高い地位にいても、平気で貧しい人とも話せるし、若い人とも話せるし、年寄りとも話せるし、誰とでもいつでも心が交換できるような自由な心になることが、宗教の極意なんですよ。

どの世界に住んでも、例えば地獄に住もうと、靈界に住もうと神界に住もうと、何処に住もうと自由で把われがない、という心にならなければ、本当の解脱というわけにはいかないんです。

解脱への道

一つの固まった行をしなきゃ淋しいような、行をしていなきゃ自分が頼りないような、それじゃあ解脱してませんね。何をしなくたって、どうしたって、自由自在ということにならなきゃいけないのだ。だけれども、そこへ行くのが大変だ。

そこで私は、あらゆる想い、悟ったという想いも、駄目だという想いも、相手が悪いという想いも、自分が悪いという想いも、失敗したという行ないも、すべて消えてゆく姿なんだというんです。

この世に現われて、どんなに偉そうに見えたって、偉くなさそうに見えたって、そんなものはどっちにせよ消えてゆく姿。

在るものは何かというと、宇宙神の光が流れて来ている。流れてそのまま生かされている。生かされていることと生きているということが全く一つになっている境涯、そういう境涯が一番尊い境涯だ。

だからその他のあらゆるものはみんな消えてゆく姿なんだ、ということなんですね。それでふんわりしていればいい。そのまま生きていればいい。

“そのまま”とどこの宗教でもよくいうけれども、その“そのまま”がなかなかわからない。そのまま、というのは、現象界のあらゆる出来事に把われない。把われてもすぐ放せる。消えてゆく姿！とパッと放せる。

そういう心になることが一番の悟りなんですよ。そこへ行くんですよ。

宇宙人というのはそういう境涯なんです。神さまのみ心と自分たちのやっていることが全く一つになっている。

それで神さまをとても信じているし、判っているんです。神のみ心によって自分たちが仕事をしているんだ、ということをハッキリ知っている。

それで、自分たちの想いと神さまの想いとが一つになってスーッと降りてく

る。そういうのが宇宙人なんです。

そのようにやがて地球界もすべてなるんです。靈体になってしまふのと同じですね。すべての修行はそうなるためのものであって、神通力があろうが能力があろうが、それはこの世だけのことあります。

だから、解脱した境地からでてくる光、力というものは、それは素晴らしいし、本当の意味の神通力ですね。

そうならなきゃいけないし、やがてみんなそうなるんです。

為すべきは全託のみ

役行者は、自分でもってこの体をスッと消すことができた。統一したままで姿が消えちゃったんだから、凄い意志力というか念力ですね。

そういう念力の持ち主でありながら、消えてしまってから何をやったかというと、自力は駄目だと思ったんだネ。

自分の力では限度があって、いくらやってもやっても駄目なんだ、だから全部大神さまの中に入らなきゃいけない、というんで、全託するという所へ入っていったわけです。

それで救世の大光明の中心者になったんですよ。

よく滝に当たったり、水をかぶったり、山に籠ったり今時やっている人もあるけれど、そんなものの昔の修験者からくらべたらものの数でない。

昔の役行者一統の修験者の難行苦行なんていうのは、もう言語に絶するんですよ。狼や獸ばかりがいる山に籠って、食物もなければ何にもない。雨風にさらされても平気。誰も人気のないような所、チミモウリヨウがいる所でスーと坐って、修行できるなんていうのは大変なことですよ。

チベットの仙人たちもやってますね。そういうことを昔の修験者はやっていたんです。

その修行の様なんていうのは、今の人人が「滝に当たって行きました」「山に籠って行きました」「断食しました」なんてのとは、てんで桁が違うのですよ。

だから、どんなに修行したって昔の修験者の修行には及びもつかないんですよ。

それ程やって、生命をかけ肉体をすべて捨てて、修行に修行を重ねた修行者のような人のいうことが何かというと「全託あるのみ。宇宙神のみ心の中に全部投げ出す以外に悟る方法はないぞ」ということ。

そして私のところに来ているわけね。実は私なんだ。

だから、あそこで修行しました、なんて偉そうなことをいってくる人もありますが、子供のような赤ん坊のような修行をして何をいっているか、と私は思うんです。

それほど修行がいるわけなんです。ところが皆さんもやっぱり過去世においては、大変な修行をして来ているんですよ。

だから今は、全託行だけでいい。過去世からの修行の最後の磨きをかけるための全託行になって、すべて神さまのみ心の中に投げ出せる、ということになるわけなんです。

全託行は日常生活の中で出来る

段階がありまして、小さな修行から凄い厳しい、生命もすべてもかけた修行から、すべてを投げ出す、全託するというところまで来る。

だから神さまにスパッと全託できるような人は、さんざん過去世において修行した人なのです。

ですから今更、滝に当たったり、水をかぶったり、呼吸法をやったり、そんな小さな修行なんかする必要はないんですよ。

今は、神さまのみ心に「世界人類が平和でありますように」とすべてを投げ出してしまう。

「世界人類が平和でありますように」という時には、もう、自分というものは世界人類の平和の中に入っている。

世界人類の平和というものは神さまの大御心なんだから、神さまのみ心の中に入っているわけなのです。消えてゆく姿で世界平和の祈り、というのはそこなんだ。

自分も無い、人も無い、すべてないんだ。みんな消えてゆく姿なんだ。あるものは神さまの平和のみ心だけなんだ。

「世界人類が平和でありますように」って入っていくんですよ。それが全託

なんです。

変に修行したい人があるんですよ。したきゃしたってかまわない。只そんなものは何にもならないということなんです。

例えば、発明がある。99%は出来ている。あと1%がどうしても解けない。その発明は完成してないわけです。

そうすると、全然何も考えていないことと、九十九出来ているけれども一つ足りないということとは、やっぱり効果的に同じことなんです。役に立たないんだからね。

テレビがある。けれど真空管が一つなかった。というのと、全然テレビがおいてない家と同じでしょう。それと同じですよ。

かえって使えないんだから邪魔かもしれない。使えないものは無用の長物でしょう。だから使えないことをやってもしようがない。

使えるのは何か、というと、完成品です。ズバリ完成品を持って来なければ何の役にも立たないでしょう。

今はズバリ完成品を持ってくる時代なんです。こちよこちよ小さい修行なんかしなくていいんです。

修行といえば、日常生活であらゆる修行をしているわけです。子供が病気になり、夫や妻が病気になり、自分も病気になったり、貧乏になったりするのは、大変な修行なんです。

それが修行なんだから、わざわざ昔のように山に籠ったり、滝に当たったりする必要はない。そんなにして体をいじめる必要はない。

それよりも、どれだけ神さまのみ心にまかせられるか、ああこれで生きても死んでも神さまが生かして下さるんだから、これでいいんだな、どんな悪いことが現わっても、それは消えてゆく姿なんだな、と、何でもかでも神のみ心の顯れだということを肯定できるような、すべてに感謝できるような、そういう心になることが、修行の修行の最大の修行です。

心の修行が一番

心の修行というのが最大のことです。体の修行など二の次、三の次です。心の修行が出来ると体が自然に修行していくわけです。

力道山のことをいうんじゃないけれども、力道山はものすごくタフネスで、凄い力の人ですね。だからまさか力道山が短刀で刺された位で死ぬとは誰も思わない。あんなに鍛えた人なら短刀で刺された位なんでもないと思いませんね。だけど死んでしまった。かえって偏頗(へんぱ)に肉体の外部は鍛えてあるけれども、中の内臓器官は案外弱っていたかもしれない。

いかに肉体を鍛えたといっても、現代で力道山ほど鍛えた人はないでしょう。鉄亜鉛(てつあれい)をぶつけたり、鉄の玉をぶつけたり、バットで叩いたりでしょう。惜しいことをしちゃったと思うのですよ。

あれだけ鍛えられた人が、短刀で刺された位で死んじゃうでしょう。いかにいかに人間が肉体を鍛え鍛えたとて、たいしたことではない、ということがわかるでしょう。

何が一番大事か、というと、心を鍛える、要するに想いを鍛える。想いが乱れない。恐怖が起こらない。弱らない。そういう想いにしなければならない。

何があっても心が平然として澄み切っていられるような、そういう人間になることが一番大事ですよ。それは永遠の生命を得たことです。

心が何事があっても乱れないということは、永遠の生命を得ることなんです。

肉体はいくら鍛えたって、死んでしまえばそれまで。あとは心の在り方です。心の問題で高くも行けば低くも行く。心が全部決定する。

心というのは想いのことです。想いが乱れなきや心が平静なんです。心と想いとは別のもので、心の上を想いが往ったり来たり走っているんだからね。

心というものは神さまの光そのもの、生命そのものです。想いが往ったり来たり走らないでピタッと本心の中に入ってしまえば、スカーッと光り輝いちやうわけです。

そういう人間になることが一番大事なことです。肉体を鍛えるということも必要だけれども、心を鍛えるとは別の問題で、心を鍛えることが一番大事です。

ところが、どうやったら心を鍛えられるのか、方法がわからないでしょう。そこで、想いというものを、すべて神さまのみ心に投げ入れちゃいなさい、生きるも死ぬも、現われて来るすべては神さまのみ心でなされているんだか

ら、自分の想いで何事も出来ないんだ。肉体の私は何事も為し得ない。だから想いを全部を神さまのみ心の中に入れてしまいなさい、というのです。

只入れたんじゃ面白くないからね。目的をもって入れなさい。何の目的かというと、世界が全部平和になりますように、誰も彼もがみんな仲良く、みんな調和して、平和に生きていかれますように、ああ世界人類が平和でありますように、というような目的をもった中に想いを全部入れちゃいなさい。

それで神さま有難うございます、と入れると、そうすると、世界人類が平和であることは神さまの大御心だから、み心の中に自分が入っちゃうわけですよ。自分の本心の中に入るわけです。そうすると想いが乱れません。

世界平和の祈りに決定(けつじょう)したら想いは乱れません。そういうことを悟りというんです。

だから一番やさしい悟りの方法、解脱の方法が、消えてゆく姿で世界平和の祈りだというんです。

いくら只想いを叩いてみたって、体を叩いてみたって、それは一部の枝葉のことには過ぎない。

全部投げ出すことが一番よい。役行者がいっているんだから間違いない。役行者ほど鍛えに鍛えた人はないんだから。

その役行者が「いくら鍛えたって、そんな鍛えは枝葉のことだ。一番素晴らしいのは全託なんだ。只全託といつもなかなか出来ないだろうから、世界平和の祈りのような、大きな目的をもった中に自分が入っていき、想いを常に常に入れていれば、知らないうちに全託になってしまふんだよ。それが一番やさしい解説する方法なんだよ」と教えてくれているんです。

肉体は何事もなし得ないんだ

私はいつもこればかりいうけれどもサ、自分の肉体に力があると思ったら間違います。肉体はそれ自身では力がないんです。いかに神さまのみ心の力、能力を自分の肉体を通して現わし得るか、ということです。

どれだけ神さまが使い良いような肉体になるかということが問題です。

神さまが使い良いような肉体になれば、その人はしめたもの。100%使い良いようになればそれは覚者、仏です。

だから「どうか神さま、自分の肉体が使い良いようになりますように」つま

り「我が天命を完うせしめ給え」というわけです。

そうすると、自然に、神さまが「よし愛(う)い奴じゃ」っていうんで、スー
ッと光を流してくれる。

自分がこう修行しなきゃ、自分で、自分が……とそんなことをいっていた
ら、ろくなことはない。

それはそれだけ神さまから離れている時。神さまどうかみ心のままになさし
め給え、と想っている時には、神さまはやりやすいんです。

それで神さまが修行させたほうがよければ、何処かへ行って修行させるかも
知れない。

病気をさせたほうがいい時は病気をさせるかも知れない。それは向こうさん
の勝手です。しかし、やがてはその人を充分意義ある仕事に使おうと思って
そうするわけです。

それは神さまが知っていらっしゃるんだ。(神さまというのは自分の本心、あ
るいは守護霊守護神といってもいい)

だから神さまに委せればいい。これは私自身がさんざん経験して来たんだ
し、いろんな人を指導して、そうやったら立派になっていっているのです
よ。

自分が自分がと思う時には、こうしなきゃと思った時は、祈りの中に入れて
しまいなさい。

それでもスーと出て来てやりたかったらやればいい。やったことが失敗で
あろうと成功であろうと、そんなことは問題じゃないんです。

只自分が一生懸命神さまを信じて、神さまのみ心の中に入りながら、世界平
和の祈りをしながらやっていけばそれが失敗であっても成功であっても、失
敗はやがて大きな成功になるし、成功は次の成功を産むでしょう。

とにかく、自分のやらなきゃならない大きな天命を果たさせてくれるので
す。100%全託すれば100%自分の天命が完うされる。90%なら90%、80
なら80%と、どれだけ委せたか、全託の程度によって、天命が大きくも小さく
も果たされてゆくのです。

(昭和39年1月27日)